

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

1. 医学部・医学系研究科

研究 1-1

医学部・医学系研究科

I	研究水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究活動の実施状況については、平成 16 年度からの医師の卒後研修制度の必修化は大学院博士課程の入学定員に対する欠員や研究生の減少(1/2)、さらに卒後臨床研修医の激減(1/4)をもたらし、診療に従事する臨床教員の研究活動に大きな影響を与えており、欧文論文数は、平成 17 年度以降漸増しかしていない。一方、学会活動は学会自体が増加していることもあるが、総じて上昇傾向にある。共同研究や一般受託研究の受け入れはほぼコンスタントに行われているが、治験薬試験・病理組織検査は減少している。研究資金の獲得状況について、科学研究費補助金の内定数は減っているが、1 件当たりの金額は増加している。競争的外部資金の獲得や学術振興後援資金として高額の寄附等もあり総じて研究資金の獲得が進んでいることは、相応の成果である。

以上の点について、医学部・医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、医学部・医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、個別の業績をみると、基礎医学、内科系臨床医学、外科系臨床医学においてそれぞれその分野のトップジャーナルに論文が掲載され、

学術的にも高いレベルの研究業績を上げている。これらの業績の中で、特に卓越した業績と判断された業績は2つで、1つは、ナルコレプシーにおける情動性脱力発作とオレキシン系の機能異常の関連を調べたものであり、掲載誌は *J Physiology* で決してインパクトファクター (IF) は高くはないが、古い雑誌で影響力は高い雑誌である。もう一つは、*Nature Medicine* に掲載された炎症性の頻脈の機序の解明につながる業績で、IF は勿論影響力の大きい雑誌である。社会、経済、文化面では、社会、経済、文化的意義の高い遠隔医療に関する「アジア・ブロードバンド計画」が、第一弾プロジェクトに採用されていることなどは、優れた成果である。

以上の点について、医学部・医学系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、医学部・医学系研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果 (判定) を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質 (水準) を維持している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 2 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果 (判定) を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。